Clinical Characteristics and Long-Term Outcomes of Rotational Atherectomy — J2T Multicenter Registry —

メタデータ	言語: English
	出版者:
	公開日: 2018-05-20
	キーワード (Ja):
	キーワード (En):
	作成者: 岡井, 巌
	メールアドレス:
	所属:
URL	https://jair.repo.nii.ac.jp/records/2002360

授与機関名　順天堂大学

学位記番号　乙第 2423 号

Clinical Characteristics and Long-Term Outcomes of Rotational Atherectomy ― J2T Multicenter Registry ―

（ロータブレーター施行後患者における臨床背景と長期予後の検討）

岡井　巌（おかい　いわお）

博士（医学）

論文内容の要旨

冠動脈硬化の狭窄病変に対しカテーテル治療(PCI)を行う際、石灰化の強い病変では拡張が不十分になりやすく合併症も多く予後が悪いと報告されている。石灰化病変に対する PCI では石灰化プラークを削る道具であるロータブレーターを使用し治療成績の向上を目指してきた。

今回、PCI におけるロータブレーター施行患者の臨床背景と長期予後に関して、順天堂大学、東京女子医大、帝京大学の 3 大学で共同研究(J2Tregistry)を行った。

冠動脈石灰化病変に対して 2004 年から 2015 年の間でロータブレーターを施行した連続症例 1090 人の臨床背景と予後を後ろ向きに解析した。Primary endpoint は MACE(総死亡、急性冠症候群、ステント血栓症、脳卒中、標的血管再血行再建)、secondary endpoint は心臓死と設定した。予後解析はそれぞれのエンドポイントでのカプランマイヤー曲線を作成し評価し、多変量 COX 解析を行い予測因子の検討を行った。臨床背景は、平均年齢が 70 歳、男性が 75%だった。基礎疾患は糖尿病が 60%、慢性腎臓病が 47%、透析患者が 28%と高率に合併していた。病変としては、多枝病変を有する割合が 73%、急性冠症候群が 15%、慢性完全閉塞が約 5%含まれており対象血管は左前下行枝が 68%と最多であった。ステントは第一世代薬剤溶出性ステントが 52%、第二世代薬剤溶出性ステントが 36%の使用率であった。96.2%が病変の良好な拡張と血流を獲得し手技に成功していた。院内合併症では、死亡を 3%、心筋梗塞を 2.1%、緊急手術を 0.6%に認めた。

予後に関しては平均 3.8 年の追跡期間で MACE は 5 年で 46.7%と高率に認めた。心臓死は 11.8%であった。COX 単変量解析では年齢、BMI、糖尿病、慢性腎臓病、透析、CRP 高値、急性冠症候群、低左心機能がいずれにも共通する予後不良因子であり、スタチン系薬剤の内服は共通する予後良好因子であった。

多変量 COX 解析を行うと MACE に関しては、年齢、慢性腎臓病、透析、急性冠症候群、低左心機能が有意な予後不良因子であり、スタチン系薬剤の内服と薬剤溶出性ステント留置が有意な予後良好因子であった。特に透析患者は最も強力な因子であった。心臓死に関しても年齢、慢性腎臓病、透析、低左心機能が同様に有意な不良因子であり、スタチン系薬剤の内服が有意な良好因子だった。心臓死に関しては糖尿病、多枝病変も有意な因子であった。

石灰化病変に対するロータブレーターは成功率も高く有用であると考えられたが、長期予後を分析すると MACE は依然として高率に認めていた。